「つながりのちから」　～ 親子のつどいから見えること ～

吃音親子のつどい「ほおーっと」同行人　桑田 省吾
（ 神戸市立本山南小学校そだちとこころの教室・学校心理士 SV ）

はじめに

「どもる子どもに果たして支援は必要か？」「もし必要ならば子どもたちはどのような支援を求めているのか？」・・・そのような「問い」を持ちながら、神戸でも学校や幼稚園で、また通級教室や家庭でどもる子どもへの支援の試行錯誤がなされてきました。

その中でどもる子ども自身(個)への支援以上に重きが置かれるようになったのが「仲間との出会いの場作り」や「幼児から成人までのつながり作り」であり、それを実現できる取り組みのひとつとして「親子のつどい」などの「場」が注目されてきました。ここでは街の集会施設を利用して学期に１回行なわれてきた「親子のつどい」の中で感じてきたことを紹介します。

◆　震災と支援　～“もうひとつのライフライン”

私がどもる子どもの支援に関わらせてもらうようになった年に阪神淡路大震災があり、その日から神戸市では教職員も多様な支援活動に参加することになりました。

当時はまだ災害ボランティアのガイドラインは明確ではなく、どんな支援が被災された方々の『自立を支援する』という本来の目的に沿っているのかなど振り返る余裕もなく、現場で良かれと思うことをやみくもにやるという感じでした。被災地では食料や日用品などの物資や水道・電気・ガスなどの目に見えるライフラインは順調に復旧されていったものの、被災された方々の閉塞感や孤立感は逆に日を追うごとに大きくなっていきました。きっと自立のための**“もうひとつのライフライン”**であろう**人と人との「つながり」**が、重要視されないどころか、復興最優先の看板のもと、どんどん分断されていったことが大きな要因だったのではないかと考えます。

「配慮の名のもとの支援が逆にストレスの増加や否定的な思いへのとらわれを増し、支援への依存化などのリスクも生み出す。」それに気づけたのは表向きの復興が一段落してから。支援の行いが「本当の支援」になりうるためには、**支援する側の自己検証**が何よりも大切なことを痛感しました。

◆　担当者の wants から親子の needs へ

復興が進む中、神戸の通級指導教室においてもこれまでしてきたことを検証しつつ変えるべきことは変えていこうという気運を高めていきたいと思うようになりました。(中央では「養護訓練」から「自立活動」への移行、新しい「支援教育」等についての議論もスタートしていた頃でした。)

・担当者の wants？

当時はまだ「遊んで気持ちを楽にする」「音読練習」「自由会話」などのその場その場で担当者が良かれと思う“思いつきの支援？”がなされるだけでした。また幼児期の発吃への大きな不安や情報の不足・先を見通したガイダンスの無さ、思春期の２次的な問題の深刻化などに対しても、それが吃音が孕む大きな問題であることは分かっていても十分な対応は考えられずにいました。(*1)

また、指導終了者へのアンケートに見られる「いつまた吃音がひどくなるか心配です。」「いよいよ思春期、吃音のことは私にも話してくれずわたしも触れないようにしています。」という保護者の声のように、教室に通っている間はまだ気が紛れてもその後また悩みは深まるばかりというのが現実･･･それを知りながらも、どうしたらいいか明確にできないままでいました。

・親子の needs

“どもること”は日々の暮らしの中でとても大変なことで、ひとつひとつどう対処していくかは重大な課題ですが、本当に親子が求める**“needs”**は日々の苦戦の向こうにある**“自分を知り、活かし、自分らしく生きていける”**ということでしょう。子どもが自分を否定的にとらえることなく、試行錯誤しながらも自分の人生を自分で歩んで行けるための「本当に教育的な支援」がどのような場で実現できるのか、子どもや保護者を「支援される側」に置いたままの指導や一方的な終了をしない･･･そんな関わりができるのか、問いながら辿り着いたひとつの答えが「親子のつどい」という「場」での「つながり」やそこでの「学び」を通級指導と並行してもっていくことでした。

◆「親子のつどい」の中で

指導でもカウンセリングでもない参加者主体の場。ここでは何よりも「くらしの中でのナマの吃音のこと（実体験）」を飾らず話題にしていけます。またよく知らなかった自分のどもりを、友だちを鏡として知っていくこともできます。そこでは自分で自分のテーマを見つけることができ、友だちや先輩からジカに学ぶことがどれだけ大きいことか実感することもできます。また大人も、吃音について子どもと話し合う際にはどのような態度で臨むことが望ましいか、本当はどんな支援を子どもたちが求めているかなど、専門書や研修等ではなかなか答えが見つからなかったことも自然な形で学んでいくことができました。　＊つどいのこと：(*2)←ネットで検索できます。

・初参加の方からの感想（中学生男子の保護者）

これまで友達や周囲の人に自分の吃音をひた隠しにしてきた私や息子は、まず参加されている**人数の多さ**に驚きました。皆さん**明るい楽しい方ばかり**でした。

楽しいゲームのあと、親と子が別れて話し合いをする際に、息子は嫌がるかなぁと思い「大丈夫？」と声をかけると、「大丈夫や」と返ってきたので安心して隣の部屋に移りました。

話し合いが終わり息子たちの部屋に戻ると、息子は隣の席の方と楽しそうに話をしていました。

『来て良かった。楽しかった。俺だけじゃないんやな。また来たい』息子もそう言ってくれました。

◆ つながりの「質」を決めるのは、同行するものの立ち方

つどいのスタッフは元ことばの教室の教員やどもる大人、親の会からの協力者などです。

ここではスタッフは「支援する側」ではなく、一参加者であり、同じテーマに向かい「同行する人」だととらえています。そして同行人はつどいを重ねる中で自然と次のような観点を心に置くようになりました。

◇「気楽なかたちとゆるいつながり」：「場」が長期的に継続していくことがいちばん大切なことなので、息切れしないような気楽なかたちが何よりも大切です。そして息の長い同行ができるためには子どもや保護者との「対等な関係」や「依存する関係を作らない応援」が不可欠となってきます。また、いつ来ても、来なくてもいいという“ゆるさ”も大切に思うようになりました。

◇「何もしない」：「何か用意して、何かしないと」と思わなくても、何もしなければどんどん参加者の方から動きが出て、その場にふさわしい交流が行われていくんだと確信するようになりました。

◇「対話ができる」：その場で「対話」ができることが何より大切なことです。そのためには、互いに敬意を表し責任を共有し、問い学び合える関係であり続けられるよう心するようになりました。テーマも勝手に誰かが決めるのではなく、ひとりの発言があると、それを受け止め、その中で興味を持ったことを問い返していく・・・その繰り返しが豊かな対話を生み出しています。

・・・それらのことがゆったり持続されるよう、同行人は、子どもに丸腰で出会い、共振し、自然体でナマの声に耳を傾けられる・・・子どもの内なるちからを信じ、それが自然に引き出されるのを願い、応援は「ことば」ではなく「姿勢」を持って示していく。そしていちばん大事なことは、子どもが本当に求めているものに気づき合い、それに添っていけることを大切に思っています。

それは石隈先生が『吃音ワークブック』(4)に示していただいた**「支援における関係性」**としての「①対等性②当事者性③専門性」、**「同行するときの心得」**としての「◎テーマの共有①危機感の共有②責任の共有③希望の共有」を“つどいバージョン”で具体化するものだと思います。

◆ つながりのなかで育つ子どもたち

つどいに参加する子どもたちは、「相談できる場がない」「ことばの教室の通級が終了した」などの参加理由もありますが、何よりも「出会い」を求め、「当事者同士の情報が欲しい」そして「きっとそこに求める何かがある」という思いが大きく、つどいに参加しているのだと思います。

Ａくん（中学２年男子）：幼児期(3～4 歳)に２年間ことばの教室に通級（つどいに参加１２年）

通級開始時から「親子のつどい」に参加。本人は「もう覚えてない」と言うが当時から小学生も交えた話し合いにも参加。保護者も多くの先輩お母さんから情報を得た。６年で学年が荒れたとき、一貫して指示に従えない子どもたちの側に立ち、秋の運動会では組体操に全員参加を呼びかけ、終わりの式では児童代表としてどもりながら「心配をかけましたが、今日みなさんに倍返しをすることができました」とスピーチした。水泳と勉強を両立しながら中学校生活を謳歌中。

Ｂくん（高校３年男子）：小学２年生から２年間ことばの教室に通級　（つどい参加 11 年）

つどいではもう１０数年スタッフ役も務める。中学時代が困難と聞いていたが何とかやっていけたのはつどいで出会った先輩から「大丈夫や」と言ってもらったことが大きいと言う。今、ことばの教室担当の教員になることを目指して勉強中である。また通級中から日本吃音臨床研究会主催の吃音親子サマーキャンプにも参加。そこでの多くの先輩や仲間との交流が原動力にもなっている。

Ｃくん（小学４年男子）：幼児期からつどいに参加　（つどい参加６年）

４歳時からつどいに参加。同い年の二人の友だちと出会い、「幼稚園の先生にわかってほしいこと」「自分のこと・友だちのこと」などを定期的に語り合ってきた。今、中学生や成人の方の話にも興味を持ち、顔をつっこんで偉そうに話しつつも、毎日の遊びに熱中している。学期に１回のつどいは楽しみにしている。今、「支援のし甲斐がなくなってきた」と言う母を励ましている。

Ｄさん（６年生女子）：昨年度末に私の勤務する「こころの教室」に相談

Ｄさんはことばがつまりそうになると黙り込んでしまう。小学校入学後友だちや先生の目を意識することで、赤面や視線恐怖もひどくなり、５年生では家から出ることもできなくなった。心許せる友人とは出会えるが、自分と同じことを感じられる理解者はいないと苦しんでいた。今も「うまくできなかったこと」（過去）や「もしうまくできなければ」（未来）への不安に苦しむ。通級教室には母と何とか入れるようになったが、未だ人の中に入っていく行動は起こせていない。

どもる子どもたちからは、早期にしっかりとした見方を持てることの大切さや、同じ立場の仲間の「生活の中で生まれたことば」を知ることがどれだけ心強いことかを教えてもらっています。

ある保護者は「今、あれこれありながらも、日々行動を起こせているのはつどいで仲間に出会えたことが大きい」と言われます。Ｂくんは今、いろんな保護者や後輩に発信することで自分のやってきた道を確かめ、自分の両親への感謝、そしてどもっていることへの感謝も深めています。

Ｄさんは２次的な問題が膨らんでからの相談でしたが、これからの彼女の行動を支えていく鍵も、つどいに参加する子どもたちからの示唆の中にあると思っています。誰よりもよく気が効き相手を思いやることができるＤさん。彼女の力を信じ、まずはひとつひとつの暮らしの中の課題にじっくりと取り組んでいくことがスタートだと思っています。

◆ 子どものちから・つながりのちから

年に数回しか出会わない子どもたちが、自分のテーマと向き合いながら一日一日を過ごせていることはすごいことだと思います。自分のちからを認め同行してくれる理解者がどこかにいることが、彼らが本来持っている「ちから」を発現させ、それをしっかりしたものにしているのだと、どもることを一人で悩み何十年と苦戦してきた私は思います。

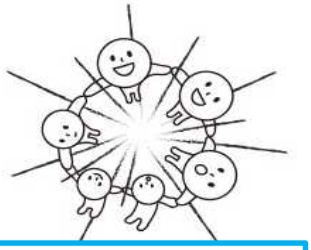
日々の暮らしの中で、たとえ「個」のちからに自信が持てなくなるときがあっても、また「つながり」の中で自分の本来もつ素敵なちからに気づき直して、それを育んでいってくれる。あらためて「出会い」「つながる」ことの「ちから」の大きさを感じています。

・**「出会う」こと**：Ｂくんは先輩の「大丈夫」の一言で心配だった中学時代を乗り切ることができました。「自分だけではない」という安心からスタートし、子どもたちは出会った仲間の「からだ」全体で表現されていることを五感すべてで感じ取っています。笑顔、暮らしの中の思いや工夫、自分と同じ状況を「生きている」その対等さへの嬉しさ。これは頭だけで納得することと全く違います。

・**「つながる」こと**：子どもが自分の力で「行動」を起こせるにはその土台となる「つながり」による安心感が必要です。Ｄさんのように本来持つ力が活かせるための安心感や場がないとそのまま力を発揮できずに閉じこもってしまいます。またつどいの中では他者貢献という「行動」も自然と行われています。人の中でうまく話せない苦しい経験をしても、そんな日々からでも何かを学び活かそうとする「子どものちから」、その「姿勢」や「行動」を支えているのが「つながりのちから」なのでしょう。

「つながりの中でその人に自分のちからを気づかせること、それが私たちのやるべきこと」(D.S.)

・「行動をおこすちから」：生活する中で生まれる声に耳を傾け、それを自分のテーマにつなげていくための応援が必要な場面が、子どもにも保護者にも教員にもあります。そのためにも自分の現実の生活や自分の願いについて話せる場と、仲間から気づいていける場は必要です。そして多少の不安はあっても自分のできることをしていくこと、同行人ができるのはただ子どもの生活の中での「行動」を陰ながら支えていくことだと思います。



・「自立にむかうちから」：通級で行われている「自立活動」と同じように、訓練や特別な支援ではなく誰もができる「あたりまえの支援」（実際の暮らし）の中でこそ子どもたちの本来もつ力が生かされると思います。子どもの力が引き出され活かされていく「教育的な支援」が、実はとてもシンプルな「つどい」という活動の中でも行われうるのでしょう。

・「息の長い場のちから」：復興支援と同じく、大きなテーマに向かう中で溺れそうな時はあります。が、時間をかけて向き合うに値する素敵なテーマに向かう中で絶対に絶望者を出してはならない、そのためにも心の拠り所となれる居場所はゆるく長く必要と考えます。たとえそれが年に数回の出会いであっても。

◆　つながりの広がり

もう４年ほど前になりますが、つどいに数回参加されたお母さん方からこんな発信がありました。

『親子共また来たい！と思うとても良いつどいに出会うことができました。（が）年に３回では少ないな、子どもの通う学校ではどもる子どもはいないのかな？このような会がもっと身近な地域でできないものだろうか？と。自分で親子が集える場を作ったらどうかな？でもどうしたらいいのだろうと迷い、その思いを「ほお～っと」主宰者に相談しました。』　(H24 兵庫県西宮市「あのねの広場」案内)

「仲間と出会い学んでいける場が身近にほしい」という思い、「これなら私にもできる」という思いが参加者の中にも起こり、つながりのネットワークが広がっています。それだけではなく、担任の先生やことばの教室の先生をつどいに呼び込む子どもたち、学級通信や学年だより・町の広報誌などで「吃音」の情報を発信する子どもやおかあさん方、どもる大人の方々とレクレーションを企画し交流する方々、みんなで吃音親子サマーキャンプにも行こうと参加を呼びかける方々…等等、思い切ってつどいに参加した第一歩から後、どんどんネットワークを広げています。

おわりに

支援者が単に「悩みや不自由のない生活」を理想としていたら、本当の支援はなかなか実現しないことを復興支援の中で痛感してきました。本当に「豊かな生活」「豊かな生き方」とは、そして「豊かなつながり」とは。その問いへのヒントや、支援者が自己検証するための示唆は、つどいの中で活動し育っていく子どもとおとなの中にありました。子ども自身(個)への支援以上に「出会い」や「つながり」を大切に思うようになったのは、子どものちから・つながりのちからの豊かさに毎回感嘆し、それを確信できるようになったからでしょう。　そんな風景を言葉にしようとすると、行き着くところ いつも伊藤伸二さんのこのメッセージに行きついてしまいます。

あなたはあなたのままでいい
あなたはひとりではない
あなたにはちからがある

＜関連文献＞
(1) 2003「早期教育相談の狭間を埋めることばの教室」桑田省吾　　特総研 研究報告書 B-174
『「ことばの教室」における早期教育相談と保護者支援』久保山・牧野 他　所収
(2) 2006「出会いから始まる主体的な学び」桑田省吾　特総研 研究報告書 B-213
『吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために』　牧野泰美 他　所収
(3) 2004「いま求められる教育的な支援とは何か」桑田省吾　第 33 回全難言協全国大会(近畿)要項
(4) 2010「子どもが生きることをどう援助できるか～吃音への援助から学ぶ」石隈利紀
『吃音ワークブック』伊藤伸二・吃音を生きる子どもに同行する教師の会 解放出版 所収
＊イラスト：「Collaboration Patterns Project」より